

鹿児島研修 報告レポート

○はじめに

8月1日から8日までの1週間、手話サークル「ちゅらたま」のサークル員12名で、鹿児島県始良市の住宅型有料老人ホーム「エスプリ鹿児島あいら」へ研修に訪れた。

今回私たちは、「住宅型老人ホーム利用者の暮らしの自由について」という研修テーマのもと、在宅と施設ケアの中間に位置する住宅型老人ホームの役割やそのあり方、将来の方向性など、多方面の視点から住宅型老人ホームを見つめることができた。その他、様々なプログラムに取り組んだり、他施設の視察に訪れたりなど、充実した1週間を過ごすことができた。研修テーマについての学び以外でも、地方での介護の限界や施設のマーケティングについてなど、鹿児島という地であったからこそ深められた学びがあった。

このレポートでは、研修の報告、エスプリ鹿児島あいらやその他視察に訪れた施設についてまとめた。

○住宅型有料老人ホーム エスプリ鹿児島あいらについて

エスプリ鹿児島あいらは、2018年3月に新築された住宅型有料老人ホームである。定員は66名で、入居対象者は要介護1～5までの、比較的自立が可能な高齢者である。自治体や地域と連携を取りつつ、外部の介護サービスや、併設されているデイサービスなど、利用者にあったサービスを受けることができる。

基本理念として、高齢者に尊敬の念をもつ、日々豊かに笑顔のある暮らしの手助けなどが掲げられていた。職員が常に学びの姿勢を持ち、社会貢献の態度を忘れず高齢者に接していくことは、介護の現場において非常に大事なことであると考えている。

施設に対する私自身の印象として、今年新築されたばかりの建物ということであり、非常にきれいで清潔感があった。また、個室ごとに淡い色で色分けされており、全体的に明るく柔らかい印象であった。施設の設計において、このように利用者にとって安心感を与えられるような工夫は大切だと実感した。

職員は皆明るく、活発な印象であった。肉体的な作業の多い介護の現場において明るく活気のある雰囲気は大切であり、職員のモチベーションにも繋がってくるものであると考えている。

利用者は様々な方がおり、1人で入居されている方、夫婦で入居されている方も見られた。

お部屋はそれぞれの利用者の好みで家具が置かれ、家族の写真も多く見られた。しかし、個室であれ半ば集団生活のようなものであり、長年住んでいた自宅のようにくつろげるかは利用者次第である。充実したケアがありつつ、利用者が自宅のように過ごすことができる空間を創り出すことの難しさを実感した。

○エスプリ鹿児島あいらでの活動報告

私たちは1週間の研修期間の中で、デイサービスでの傾聴、すいか割りの企画、施設主催の夏祭りの手伝い、そうめん流し企画、うどん作り企画に携わった。どれも施設の職員や利用者の温かい支援があり完遂することができた。

特に傾聴では、利用者の生活や暮らしぶりを知るよいきっかけになった。自らの家族を嬉しそうに語る方や、過去や職歴についてたくさん語ってくださった方もいた。単調になりがちな施設での生活の中で他人との関わりやつながりは心身の健康においてとても大切なことであると実感した。

エスプリ鹿児島あいら主催の夏祭りでは、私たちが利用者や地域の方々楽しんでもらえるよう企画を考えたり、当日の運営に携わったりした。予想よりも地域の方々が多く来てくださり、施設と地域の強い結びつきを実感した。

様々な企画を行う中で、利用者が楽しそうにしてくださったり、逆に指摘を頂くこともあったり、施設で一体となって企画を進めることができたと考える。傾聴や企画を通して、施設での生活の中でのコミュニケーションの大切さや、介護現場において学生をはじめとした若い力の重要性を学んだ。

○他施設の視察

特別養護老人ホーム マモリエあいら

要介護度3以上の65歳以上の高齢者が入居の対象である特別養護老人ホーム「マモリエあいら」の視察に伺った。

特別養護老人ホームは重度の介護を必要とする高齢者のための施設である。寝たきりや認知症など自宅での介護が困難な高齢者が適切な介護のもと、安全に生活していくことができる。しかし、定員が少なかったり、相部屋になることが多く心理的負担がかかってしまう恐れがあったりするなどの懸念がある。

マモリエあいらは、個室を自宅、個室から出ると外で、廊下やホールに自生している植物を模した植木や鉢植えが置いてあるといった工夫が見られた。個室以外はいくまで外であ

るという設定にすることで個室をより自宅空間に近づけており、また施設全体も温かい雰囲気であった。集団での生活が強いられる施設の生活において、自宅感を大切にすることは利用者の心身の健康を保つために欠かせないことであると考える。

マモリエあいらを視察し、充実した介護と暮らしやすさを両立させたよい工夫について学ぶことができた。

小規模多機能型老人ホーム さざんか園

通い「宿泊」「訪問」の機能を併せ持った小規模多機能型老人ホーム「さざんか園」の視察に伺った。

小規模多機能型老人ホームは、利用者一人ひとりの生活の機能や暮らしに合わせ、地域との交流を大切にしながら利用者の生活をサポートしている。私たちが訪れたさざんか園は敷地が狭く、木材の温かみのある素朴な印象であった。

さざんか園の近くには同系列の保育園が運営され、その他学童や障害者のグループホームがあるなど、福祉と地域が密接に繋がっている環境であった。施設で生活していたり自宅と施設の行き来だけの生活は単調になりがちであるが、子どもから高齢者まで幅広く交流できる機会が設けやすい環境が整っていることは、高齢者の生活の質の向上だけでなく地域全体が高齢者福祉に関心を持ちやすくなるきっかけ作りに貢献していると考えられる。

さざんか園を視察し、地域が高齢者福祉に関心を持ち、高齢者福祉を当事者だけの問題とせず包括的に考えていくことが理想的であると実感した。

○感想、考察

今回の研修を通して、私たちの準備の至らなさ、不十分さを痛感させられた。企画に必要な物品や材料の準備、企画の円滑な進行のための工夫などが足りず、人手不足などのトラブルにも冷静かつ柔軟に対応するべきであったと反省した。それだけでなく、学生自身が積極的に楽しむ態度を忘れず企画に取り組むべきであった。

私は今回自分自身が企画を実行する側に立って、職員の方々の日々の仕事の大変さを垣間見ることができた。職員はデイサービスの他に介護や事務など様々な仕事を抱えており、それらと並行してデイサービスを利用者と共に楽しむことは、仕事への理解や強い熱意がないとやり遂げられないものであると考える。職員の方々は仕事を掛け持ちしながらもみな明るく元気で、自分自身も将来福祉に関わることを希望している身として忘れてはいけない態度であると思った。

今回の研修を通して、介護現場で懸念されている職員の人手不足や将来の施設不足などの問題をより身近な問題として再考することができた。少子高齢化が進む中、次世代の介護

現場の担い手を外国人から獲得することが進められていたり、団塊世代が後期高齢者となる、いわゆる 2025 年問題に向けての取り組みを考えていかなければならないことなど、多くの対策が水面下で進められていることを学んだ。

上で記述した 2025 年問題は今回の研修で初めて学んだ言葉である。後期高齢者が増える 2025 年に向けて、施設のあり方を見直したり、立地のマーケティングをしたりすることがより求められると考えられる。介護現場の人手不足が叫ばれている中施設を増やしていかなければならない事実について、応急処置的に施設を増やして利用者の生活の質が落ちたり、職員の長時間労働などに繋がったりすることなどがあってはならない。利用者の生活を大切にしつつ職員不足や長時間労働などの問題を解決させるためには、まずは介護現場の現状を知り、何が求められているのかを把握していくことが大切であると考ええる。

今回の研修は住宅型老人ホームのあり方や、これからの介護現場の問題について見つめるよい機会となった。住宅型老人ホームは利用者の安全な生活が保証される分、自宅よりも自由が制限され、入居以前のように暮らすことができない。そのような不自由さを抱えながらも利用者はデイサービスを楽しみ、自らのことをたくさん話ししてくださった。利用者が少しでも自分らしくいることができる時間を大切に、お互いに毎日を楽しむことを心がけることが介護現場において大切であると学んだ。

○おわりに

今回の研修レポートでこの 10 日間を振り返り、改めて職員をはじめ多くの人々に助けられた 10 日間であった。また、学生の未熟さや準備不足を改めて反省し、次回また学生が企画をすることがあれば入念な打ち合わせとリハーサルを徹底していきたい。

この経験を忘れず、秋学期からの学びに生かしていきたい。